異文化共生

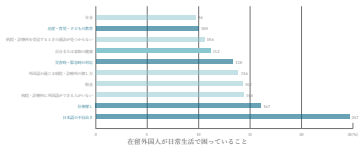
―「外国人」から「〇〇さん」へ―

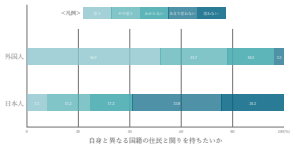
Prologue

近年、まちなかを歩いていると外国人を見かける機会が増えてきた。今後「近隣に外国人が暮らす」という状況が珍しいことではなくなっていく。外国人人口の増加と日本人人口の減少は、外国人との共生の必要性を暗示し、これからの社会は互いに理解し合える関係を築く必要がある。

Social background

在留外国人は日本での生活において言語の不自由さや子育てに関してなど日常生活の中での不安や心配事を多く抱えている。また、自身と異なる国籍の人と関りを持ちたいと考えている人は外国人は約８割存在しているのに対して日本人は約２割しか存在しない。

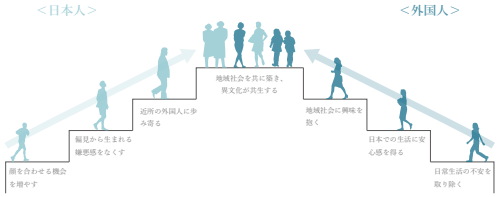




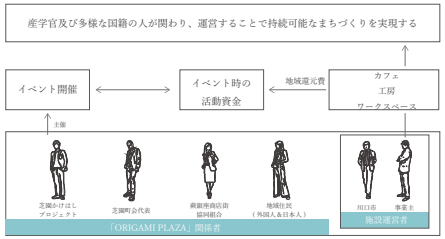
Proposal

外国人が日本で生活する際に感じる不安や心配を日常的に解決すると同時に、日本人の外国人に対する意識や偏見を改善し、異文化の出会いのきっかけを生み出す非日常的空間を「おりがみ」を応用して計画し、国籍の異なる人同士が織り重なる新たな異文化共生の場を提案する。

Scenario



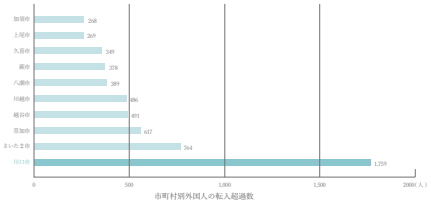
System

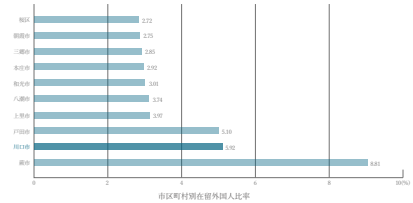


Site

－埼玉県川口市－

東京都と各都道府県の間で外国人の転入超過数が最も高い数値を示す埼玉県では、外国人の数が年々増え続けており、中でも転入超過数・在留外国人比率が他の市区町村よりも高い川口市を計画地に選定した。

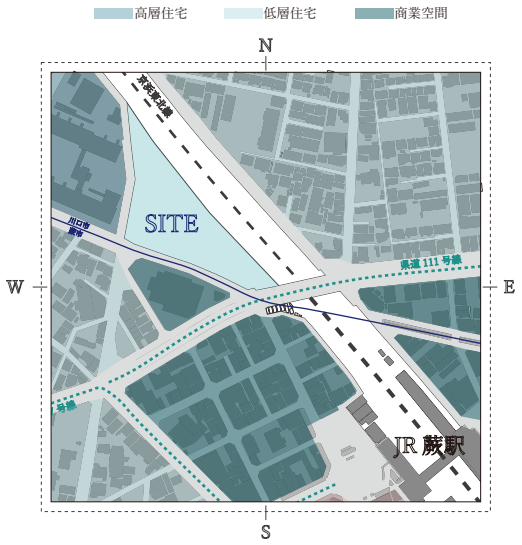




川口市は明治時代の富国強兵政策により工業都市として急激に発展した都市であり、1940 年には県内で唯一新興工業都市として指定された。しかし、1970 年代のオイルショックにより中心産業であった鋳物業は移転や廃業が相次ぎ、外国人が多く住むベッドタウンとして土地利用の転換が図られてきた。

－川口市芝園町－

川口市芝園町内の鉄道・県道・高層住宅・低層住宅・商業空間・市境など、都市を構成する要素の中心に位置し、JR 蕨駅から徒歩５分圏内の不整型な土地を計画地として選定した。

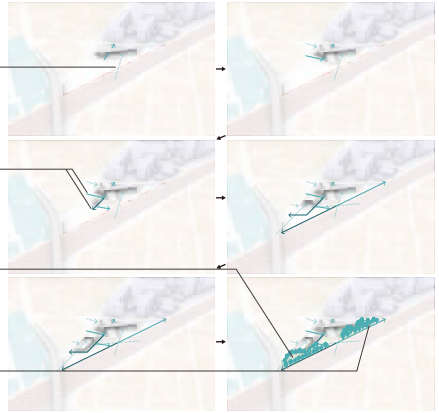


Design

－おりがみを用いた建築計画－

都市を構成する様々な要素と面し、いろいろな方角、角度、電車、車、歩行者、マンションからの見え方がある不整形なこの敷地に、「おりがみ」1枚を幾重にも織り重ねてデザインアプローチを行った。

－デザインプロセス－



視線計画

電車・車・歩行者・高層マンションなど様々な方角・角度からの視線（→）に対応する外観を形成し、まちのそとへと活動を発信するデザイン

動線計画

駅からの動線（→）と高層住宅側からの動線（→）を敷地内に取り込み、地域住民と外国人が敷地内で交わるデザイン

広場デザイン

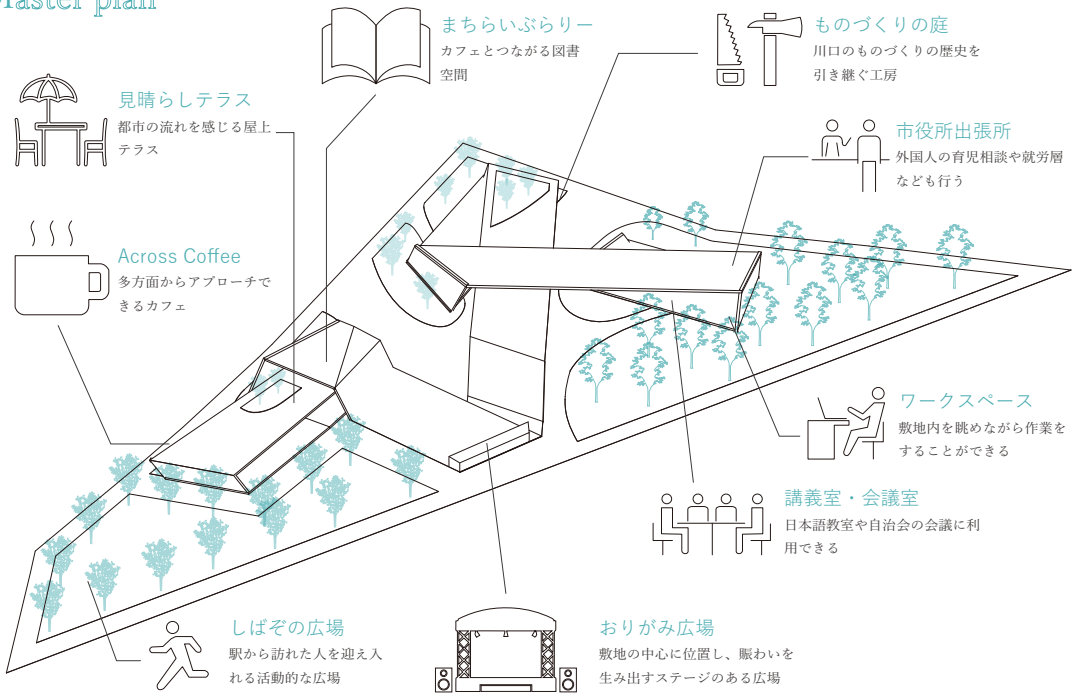
広葉樹林を規則的に配置することでどこからでもアプローチでき、異文化の地でも利用しやすい開放的な広場空間のデザイン

緑地デザイン

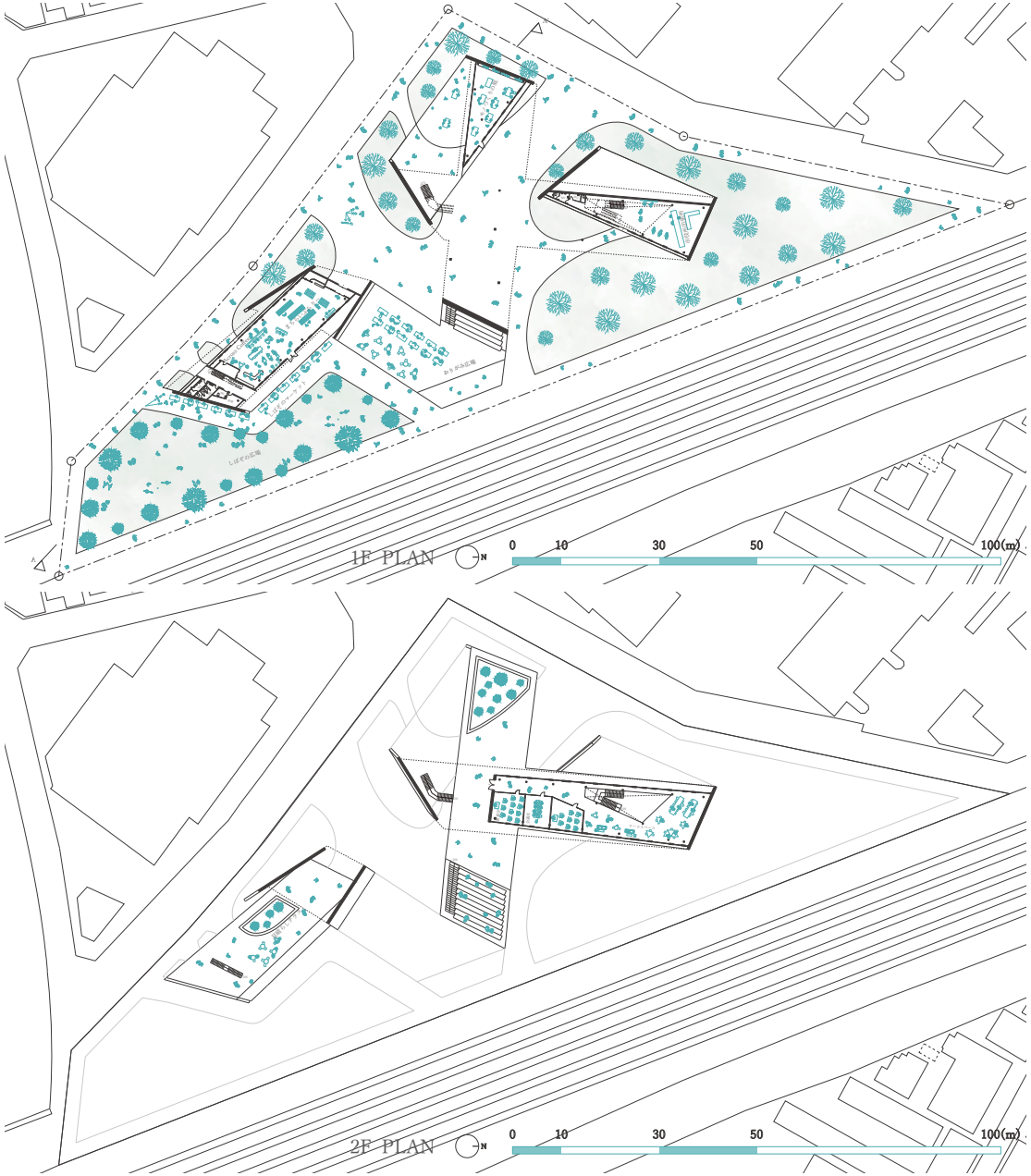
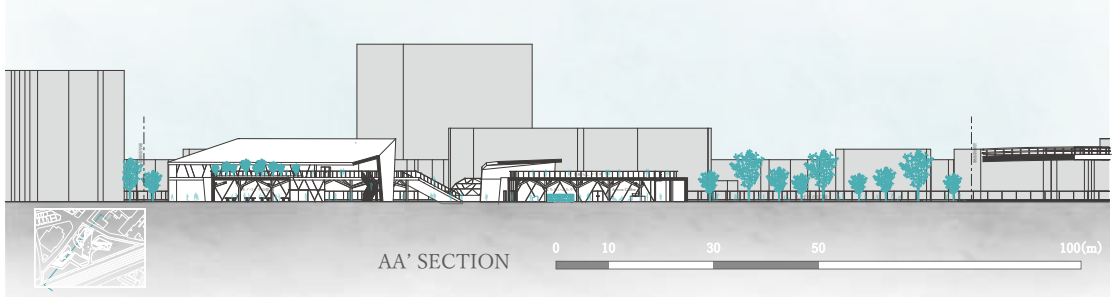
針葉樹林を配置し、住宅側に対して落ち着いた印象と穏やかな雰囲気を生み出す緑地のデザイン

「おりがみ」を織り重ねて形態を形成することで多様な形態が一つの形態として統合されるだけでなく、壁や床や屋根といった建築言語が一体となり内部空間と外部空間が調和する。そして、それぞれの空間での活動が伝達しあい、敷地内を通る人や利用する人同士の偶発的な出会いが生まれる。

Master plan



体育館は地域と敷地をつなぐ街路上に配置されており、多目的体験を通して外国人と日本人の新たな出会いが生まれる。

まちと向かい合わせになり、工房での能動的なかつどうが川口のものづくりの伝統を彷彿とさせる。

市役所出張所は吹き抜けと緑地に面し、開放感を保っている地域住民や外国人が安心感を抱いて利用する。